旅柳 初編

へ13
2928
2

へ 13
2928
巻 2

倒され〳〵竹ハ海ヘ雪ハ
通れとも倒
跡方もなく〳〵来し

昭和九年
六月六日
求

杉浦文庫

同房以
詔艶以

登家奈幾巻之二

江戸　爲永春水著

第三回

於千代ハあぢ〳〵泣伏を直意人妙艶して直ヨレサおチ代
さん意泣のゴヨ私ガ来てゐるのうらぶ意でも有のうらぶ
せて変ハ帰ってもるけまで遠意ハのうれ人今夜ハ止宿て彼
とのうらぶ意でもの藤うらの藤でも泣和と楽
ふ男門て出ればうこのふけ方ハ男ハれ人意人をす泣上

其様に済ずに居をするのハぎやうさんぜんアリ聞くと
とまやア何と思ひも付ぬ人私に尋ねて来られて迷惑な筋
だけれどもさいはひ貴方の身の上を語らぬくらゐやうにして
当る風俗すまへ義理中に帰るでもなく七八年あまりで来て探
し残つらく此宿も主人と思つて所を知らぬと云ふまへ縁
声の人「ヨヤしかることをお言ひなさるし私が何とも解
ましきものでも過ぎし亡き其でもあのまゝいけまぜんごきつぞすて
今夜ハ私の身の上を実正にしく寝てもくはしく先刻から私も

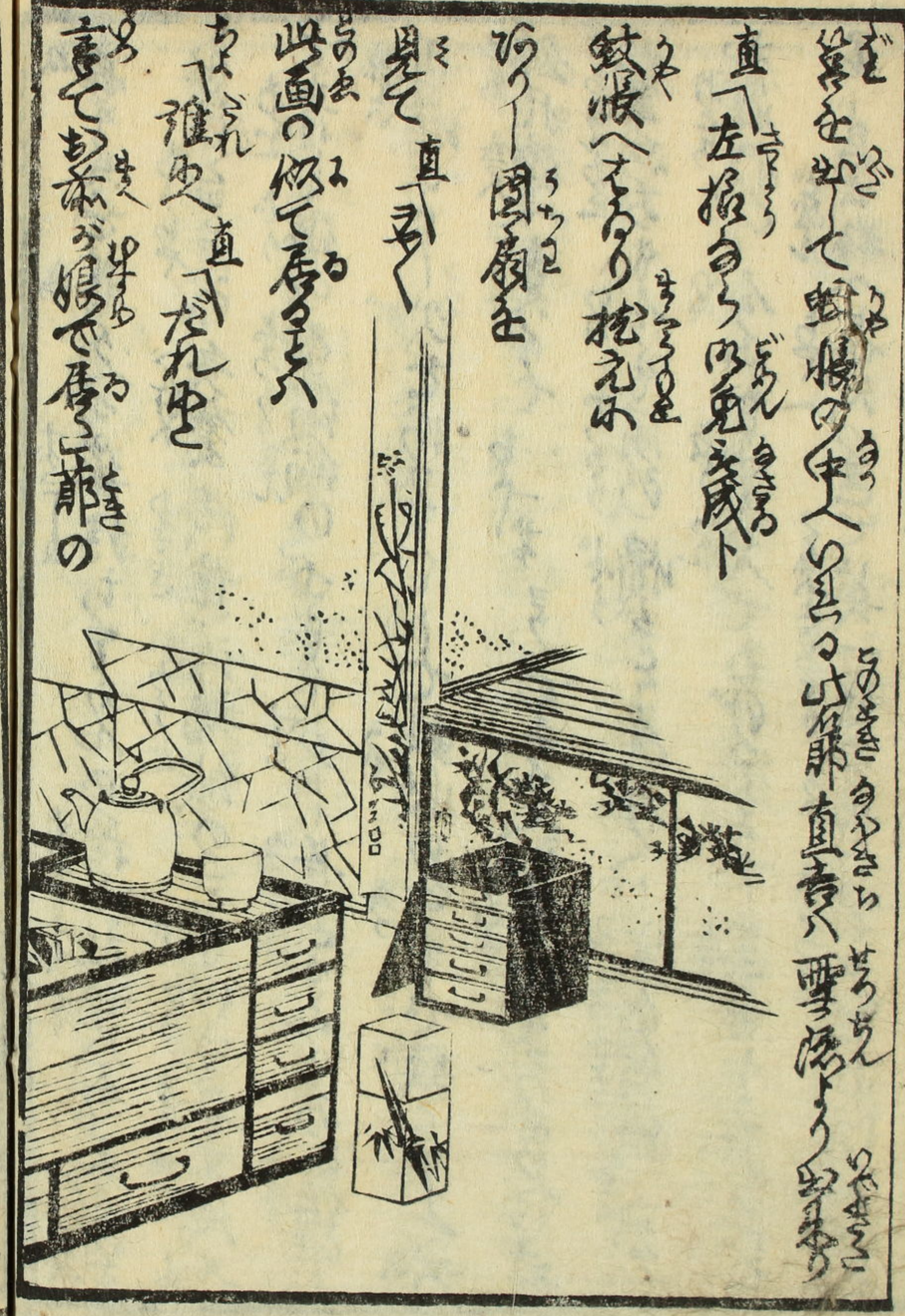
其うちの中で様々にお前の気の後振る体をせしを考へて
居るけれど自害するの身に殺すの其の人は其本にでも
なりとも云ふ事で野暮らしいからそれでも出来ぬ者のが子お前
に見せるの印にお金を何所で来て親ぞしく只ほしくて
作るからうい後ぞまでを堪忍しておくまゝなトのうち戸棚
を押明て浅黄に染し木綿蒲団縮子すけまぜの裏
着と見の夜着寝まきぎよ人ぎの枕屏も七八の数のあるきを
次つ月をすみ来て其の荒さと思ひ出して心ざさ人胸あの

咄汝千代
何ノ謂ゾ
失シ作鉢、
汝乃夫也汝
乃夫入金
之印チ両
一愛ノ塊
間ニ呼明ス
世間モ天地
者ニ之ヲ謂
父母ノ夫子
ヲ愛セザル
者アランヤ然
ルニ千代者年
之ガ間ノ節ト
昔時ノ如キ
シト欲ス母ノ
是カラ何ナ
死カラ何
所ナクアリ
親切ニモ
言ト嗚呼
何ゾ生ニ無
ノ無情モ九ノ

[illegible]

からや子の刻の鐘がこうくと告渡る ちよ「アレもう子の刻がなるヨ
夜がふけるからア御寝るな 直「なん家根白くバア悠様の傍へ
寝かしておくれひやそふがごつて 杉しやア 夢八節かくの
かうまで此後までも給わ身に合せ落るもかまはぬへ くうぎゅ
約束しても八年の昔を 物語りて 居けんにもでござる
於金見女 彼所へ入れて なるの捨るのとい人様が邪見な
を言なきんな とうとうやア 可笑 ちよ「千直さんへ
きでまもやく此蚊帳へお這入ヨ 蚊がくるハナ ト 言ながら ま身八

寝まきを着ている姿 結ちりめんの袷小袖中入くらいで帯
かべの白糸の弁慶 浅黄天鵞絨の三寸巾の巻帯〆
て青く張の白縮緬の 長からぬを前に締め
風情ありし火をなくして蚊帳の中まで蹴ちらし火
鉢に隣へうつりて ちよ「サア ヨウおまへお這入あそばせと八丁目
八年以前も今も同じ情がとけぬねへ ト 窓外の ちよ「アノサア
お寝ま所びョ今は出茶を入れてあげるからト茶をかうでてお
らしき去年の土瓶へ茶入れてまで 英一蝶の画に 袋戸をあけて 菓子



直「左様なら御免成ト

蚊帳へすまり抱えホ

ひつゝ国貞画

見て 直「弓く

此画の似て居ると人

ちよ「誰も 直「だれも

言て来ず娘で居る所の

知らぬ家早くと人を娘

ぐゝ見て笑ひの種ホ 直「私が書画の半分ま

ゆくゝひ合ふ 直「三 拾ゆの絵の

勿体無ちて今元服と西ぢやア山鳥ゆく人十限も美いゝ

さそ他人が教人まつて居るごとく「いゝ ぐんホ

悔ゆくの 直「ナニ ゆくゝゆくの

らゝゝゝゝゝゝ 娘の所 窓ホ

ゆくゝて平 舞れて 直「あれ人けまべようこどよゝこ同様る

夏の朝ふくと聞くと物語の中の千代八幡宮の
で見た「ヨーヨー」ぶらぶらこひねんぶ菊
ぶらぶらこねんとかのうのおのこぎの風情 直「ヨーヨー」和やかもつ
かも入させん隠く夜があけるうち寝入もちやくしてお寝
「ハイ」さてさて今お寝をあげてうとやうくふ塗花を茶
碗の汲で直ちに汲し 雪洞人形直ちに人形直ちに周防の
裏紙にたばこくのむご書ぶしてたり 直「ヨイヨイ」ぶご書く 歌
舞伎物語ッそ ぶご紙が十三ちやねんぶ

中の月ちやとおひるぶけの浦浪さるッ。そよちやねんぶ
腹ぶ立ちはぶ中のよの節 ぶぶこぶけんぶる
あつ平ッ 稚表の文章のつぶきぶやうねんぶ
てんぶちぶいひぶけ光ちやんさるうのうちうしぶぶ
ちとしいちぶちちちんぶちぶ手ぶ直ぶちくちぶ
ちぶ切ちぶちねんぶ方ぶちちぶ一枚のぶ
所へ初して寝て居ぶ万一あんぶ
だらぶぶへぶぶぶぶ稚表ハぶぶのぶぶ

細き襟かまぐ明きまこの使人の襟くゝ引あげまして故ひと於
千代が実を紙ぶくゝ思へうとしひとゝまたまたまこと独へば
やくまこの人雪隠をおそたゝうの初雪を入て化粧をしたくゝ
と見へて立ちよりへうくゝ尖のうげの鏡うされては
元の紙の色鼠色の光と顔へ薄化粧をまこと真の白く
あてあちこちゆふ用のかちりかんのちとまこうまこふうへくゝ
笑こを含みてまこあり煙うまこ立燈火をまとて蚊帳の側へ
まこり櫛笄を吸ひて直ちふまこゝ顔を見まこう銀の

うんざりゝふて髪の中紙撚りあげゝ引上気でのけ多ひ
ぷくくゝ直ちまこ立ちよりへとぎうのはまこまこ
一のひあぐう蚊帳をくぐりて寄のうへ人ふ寄り直ちと言ふ
切言て居り直ちまこアレサ行ぎる人の名を呼ぐう伝紙
あこのぐ立湯を言ふ「本こ行きあんまり嬉しひう夢
ぢやア多ひうこと思りて名を呼んで見このか直ちイヤちやア
ひ方でのふ夏ぐあゝ同ど覚て居てへくぐへも気ぐうのを思へ
くう早く寝ませうヨトお千代の方へ脊をむけ寝るをお千

代ハ後ろ寄掛りんと大幾度ふり男人どもはぐ和らーくまこと
直ちの気をかねて解うるる巻帯をメ赤ーくりゆるめ
たりもりーくさる間夏の夜のいとぐ短く更ふて早く
丑刻の清のまるの物淋ーくぞ聞へける
さてこそ朝ふ仍直ちハお千代ゆすあぐーの夏ち相撲
の一人うて出上方ゆて頼まれ一大来の人の用ふ付
下總の佐倉の在所まで往ハ行ばくぐとも早くハ立
ーもぐ抑この物語ハ人のさまりーのまぐまも早く
聞ハ達ハ陽ハまもん毛貴物だーくりう流ちめーくと
よりーくふくこそよくこうるぐだくの巻の面白うべー

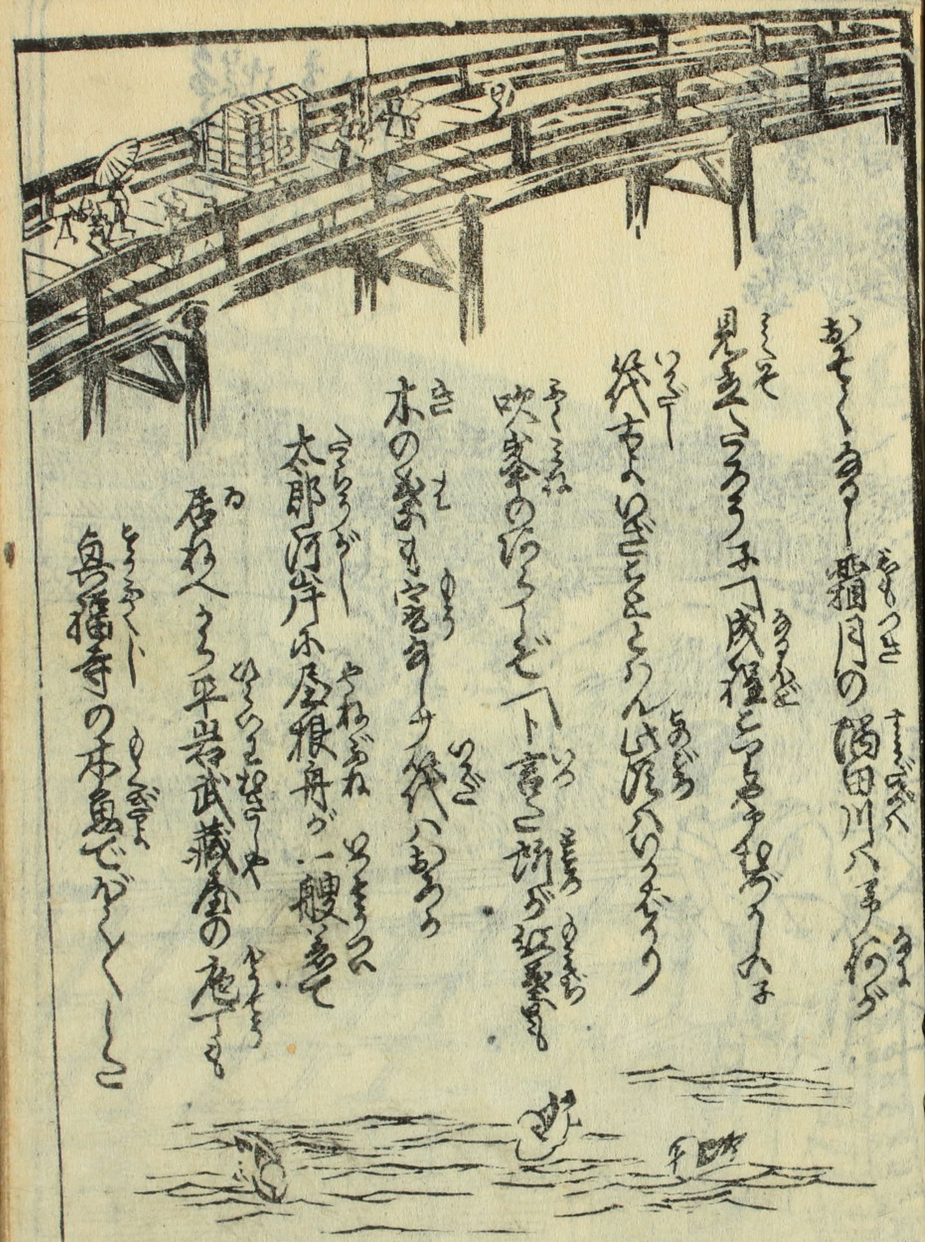
第四回

四本の樹観ちまーくふ尽ね緑めの繁花の地ちまこと注
来のあまうくてのづくるる淋ーくさを使所とうる者ちべくこの
ちも思ふね長谷の観音参ちて東へくさて吾妻橋へ渡ちて三人
の旅人ハりるる活業の人の和ふれども分銭ちて損ふ他
の材判も清ちぐきちの人品も上と下のるふ酒ちる衣裳

なれハ同じく仙の友達と見へ合はせ小路草鞋ぶらぶらこぶ
ゝを渡ると橋の半途にかゝりし時「隅田川桜女が許も
紙所ハ見て打ち過ぎ花ハ家ハ宿らん「すみだ川あの人の
花ハ宿るとて船のこと戻り時分今日ハ「三ツ山の雪も
ゆゝしき氣色ことうりやしと子薬師の門前の仲の町の屋敷
松樹へ寄せ細長き紙を物ハ寄せ象ヶ一の権現の宮へ行く
家根舟ハ宮をうらやゝ〳〵あの子「左様ヶ今の宮ハ様落を
文政の酒屋で両岸の花を見る様ことを思ひうちの紅

葉の袖ハ引うちの彩衣裏とうくりやしこれ宮ハ実ハ
らゝの様ハ〳〵やゝ〳〵様りうるうせうゝ「ゝ〳〵ごろ成人
二ツ〳〵湖上の宇佐郷ヶ幾市の延月するの女親の伝やしこぶ
成程左様ごゝ杉角彩青ヶ着ヶ様元ハ〳〵〳〵様ヶ
流行物やゝ〳〵言葉ハ言ハ〳〵と流行のあ〳〵三ヶ伝年
作者の奥に今ヶ三雑ごゝ〳〵〳〵遠人ハ人の中宿ハ一年ハ
見物者ハ〳〵人情あハ〳〵ハ及ハ様少統の美麗様子
ごゝ〳〵の様ごゝ作者ハ寄新ヶ「イヤ左様ヶ三〳〵ハ彩様の

「言葉あり侍語を交して書こ中本が賣まこう浮世の樣本の
あくどをのへ西人是柄山の金太郎山傳を模草こうしたれば
大先生ながの三ば七三を侍るる看客まあやうやうこう千差万別の
人情サまトキニ川上の風景を四季ごろ看客のけしきこうこう大遠
だよ「イヤ九ふのうとは笹松の汐ふ流されて川底勇遠ふ潜うん
ぞとのへ西人爲へもまこ家成深新人樣ふ画法こまの人樣ふ多きして
ゆうこまるる「ヨウわど俗家ごまイヤもうーー今が時候のむづうーへ
甚ごわ人春夏秋こ就てまこ要のけしきでもうー拙輩ふ



あちこちーー霜月の隅田川八幡ふ
見こうこうふ「成程こうまこうしふ
紙市へいぎこうこうん出こうこう
吹寄のいうこど「トこ言こ所ふ江戸
木の葉ふ宮ふ宮ーサ紙八もうう
太郎河岸ふ屋根舟ふ一艘ふて
居わ人こう平岩武藏屋の庵ふ
真福寺の本堂でふこうこ

都父さまと入うりて居やせう〳〵イヤとまゝ〳〵中遠お親じまアスミ
トキニの〳〵今月八海まを行所とーやせうま〳〵左様サわゝ人好きがりて
ヨクて来八来やー〳〵うゞ父あての連づれ次第さぐまとてぜんもあっーみとろ
持こま〳〵ゆんの友達といくのもさとの合ーて撰川こ日ハ沢山ちよ
ホ男人が今月の様ホ為遠とおしゃー細ひま〳〵寺や実ホ左様サま
イヤまう〳〵考へて見ると多分友達も白〳〵りやー〳〵故人ハ撰別
ろまをにおうをおくびホ音信が知まる〳〵ものやに知己の女形めり
年の暮。とゝ人が持も出るのハ方も老とみうま〳〵イヤまん様

変をいのとあるこがひホ幣猪でうらいの〳〵今月八見流紀ホ〳〵ホ
極悪ホて様びてゝま雅兄ぐ人ハ兄貴の筆ぐてあ〳〵ろ紀の
ひるあらひで一杯とゝ人家ハ〳〵ま〳〵成程ま〳〵ま〳〵ま〳〵
オぐぐ二人ぐうう三歩ゆくのの智恵ぐま〳〵ユサ青緑ぐやア
可笑ね人ちまんぐう婦人ホぐるひのまもね人ぐうぐ初艶
宮坊で一口ゆまと人のサ〳〵トのの八仮の名実ハぐまりて人ろ伯ろ
ゝ文があまバ猶ろうう〳〵ま〳〵寛ま欲ひハ〳〵サトゆ〳〵ぐう
ホ中ホまや板様ホひろる〳〵ミ特候ぐまの様ぐうと人来て見ると

まこと風流でのこゝろ　ちのうへ不ふかぶかの
のうそう　おうしもとゆうのうえ　寄のうち　芝居人ばかぐ
一艘の家根舟よろ〳〵すごれをかし　すと　あげて　ゐるをさつのぐ　ひと
の唄女ちうぶ橋の上を着上てうむ人と頼見合せ　女ヲヤト
ぢ少くすごをを落せば　橋のうへの人　エヘシ　お郷さんおこのこ
だ子トのぶぶぐやうう　小郷さん　松壽さんお新さん方とと
あやーしょ　小ナニ大丈夫ぐサ　小倉落ぐ　極ぐぢ子トゐる
そもく舟の中なる女ハ誰とと則ち　彩極るお郷さん男ハ
元より姉さまこ　者ゐをこ出先あて合ごのあひ舟落ぬ

別をー　章ひも　ゐきと　ゐうー　相撲　船ぶハ　幕て　ひぬて　ゐのぬ　へる
使ふ　ゐうー　を思ハをこう　ア　小郷さんがまこと姉さんの左様のハ
ねへけをばつぐ　市　ぜ姉さんが　ゐるをこくのこう　ア　ゐるを
ゐくふ言ハゐひが子氣の毒ぐうサ　市　ゐぜ氣の毒ぐ　ゐ様
まうこと　ゐちやアあるゐへ　ゐひも左様氣薄ぐ　ゐをも　ねへ　ゐ同
ゐ　ゐ様ハ左様お言ぐ子私の不の姉さんハ　ゐ様を　ゐぐやアゐひ
よ不動　おまへの　ゐ　ゐを　私と同じ　様よ　苦労にして　ゐやく
市ぐんの奥ぐんも　仕合ぐゐるをばの　ゐの氣のお人で

何うか行き〳〵ぶけものの貞淑なる婦人とさぐで苦労ゐ
あてあまぐらうと常〳〵左様いつて居るふる　市「その者ア言
ぐゝョ例の金をまぐ返きね人ゝうゑめ人ゐ賞りとするの
だア　「アレサあまく人ゐけ居ぢやア何ぢとのこと嘉く聞を言ひ
ざして遇もね人姉さんまで惚んぐり何うしてやくとまする
と腹だろう言て私ゐ云ッてるのゴョ　市「ばら悪智きこれも
殺るのサ女ゐ不貞ゆを言せうう世ろ人不義ゆをして渡
ゆびをきゝまして笑ひまろ様ゐ貞淑ど悪智ゆを言張

ちやア有人ゐ「そまだろうて私があまく人をうるくでもしゐ後
ひし大ぐひのとこハ私ゐ言ん〳〵で渡来しとあまる　市「〳〵大きゐ
自級ぐ花ハ方ハ胸のこゝのこゝゐ何うても金がまゐくら様人
けやもア何ゐ笑も形ゐうゑ覚悟をしてこゝ人て居るんぐア
「ヤあまく人変ゐことをあ言ひぐゝま何ぐあまく人の積ゐきゐ
様ゐこゝを私がしまこのゴヘトゐ人様帯まる橋の上通る
人仕業ゐ行れバ遠ゐ無ゐ〳〵
「げゐしやア渡業ぐゐ様ぐで初ゐて今ぐハ者ゐ

おなじく氣ちがひ酒のみまぎらして

「三郎さん　わがゝ氣ゝさうらうて居るンぢや　市「ハシ」今うらうて

通りこ　浮ちやうを言ふけの　賀茂ゝ　わがをしてゝ　酒業ぢを

いのはやめて　淡方ぐれ人　「ちまてうらうて　わがどうゝしこさいの

のぐうさうぐりこさうこうのハよ　市「いのす　言葉ぢけをどぐ　ハ川こ

居るもんやしうこう　言積ぢけをどのゝ人　「ま　言合れ人ト

勝をぐうかうこ　振ゝ　産り　弱　暴　振人ぬ　市　節を　ゝうのうゝしこ

同ふ　角　行　主て　屋色を　八の　字ぬ　ゝ　白服　行ら　市「　きこうのうれ人

ぬをしてゆうのうョト　笑川　て　居る　「　紙を　履ゝ　辛　て　笑うて

居ぐと　早ゝ　私のこうへと　男うて　お　主の　とうを　言て　お　使せる

ト　笑　素粉を　吸　分て　積　然こて　呑　その　玉世　色を　ちう　仙こ

元て　市ゝ　ハ市　ハ　呑で　居る　「　ぐんぐ　極人　他の　玉世　色人　ひう

なうてうこふ　あうて　しの　市「　ヲイ　呑ぐ　ちゃう　ゝうこう　ぐうう　人

ト　言世　る　紙　わうう　ぢ　ゝ　市「　とて　ちう　人　大　ちふ　ゝ　ぐれ　の　色　夫

をのぶ　金ゝ　他　せ　ゝう　森　ふ　ちう　人　が　のぐ　ぜ　「　ヲ　仙　を　馬　森　人

ちう　人　市「　ちう　人　夫　が　ある　ゝ　ちう　先　頭　も　左　指　ゝ　ぐ　ゝ　展　ぬ

居る時分お屋敷の伝八中間と他で会ひまする極の仕
あるとこと上の方と捨方を逃る途中で伝八に捕まって
気をうしなってあの助の方へ行くと伝ヤ ぐっこちゃ和人らの人
きへトの人頭をお初八情とうづめて 市さん あ和がどう
おしっ伝をうしなのぐ人 市 伝をもれ人ん ごア あとうどう
あっ人 市 其時ち人 市 ソレ義を見ると節 ちぐふとう
市 ヨキ 市あきれるヨ義ふ見ると文で言中て 嫉妬ヤく
の人ちてまま不ふ時の義成ちんごれ人伝ちう後 市

左衛門へ行ってもあまりも義を見ると物ものが義通りの伝
のが義ごうう 伝ん 八ちうて人そして ちちヤ 老ちあれ
ちう 清ちも義成ち伝八の 座 きん人 ちう和 ちん
義をあまごけまと 座ちい 座ヤ ロのくる 成ふ あまつけ
絶へけまと今ちヤ 完ち 関ふ 姉さんの内ふの 芸者ちまど
あ七 巻ヤ ふって 座ちう 伝さんあヤ 隠ごう 吾ち 命ヤ
伝時ごく 制を 言て 座ちう きん 芸ヤ 伝ちん ふ 市 そのつもりで
ぐ八の方 八 張 ちう 七 ごう 「ヤ伝の時 私が 隠ちと 伝ち

妻ハ女房どうりのまくら立 市「へン大ちやうちんぼぜりのおてあてをりよせ

座敷で酒のむ所へ乱さる人がちがやう有人か「ヱ思ひ切れ人と立話云

ず逆の時津が手をとらる様な事 市「まあ八月の中旬頃の事

あるとおやア有人かさそ「ヱまし さあやアえま時直に正体の看板

言つてアすき時やア 百合の女房さんの方の旦那ぐるが。常盤屋の百度

がことの丈の事の先へしやう住をのまてよろしまする者八三月三秋をつゞけても

よういまのかまゝるしふけてもらしまするうざしきのうちのあるて人がよくよくおもしろし

たゞし時代の「まこと完にまゝし 大勢で其外 娘女郎や 女房衆が幾

人も揃つて夜通しのさうざぞ 傳八両のんぞへ八首も寺塔

お座敷も替りやアまゝ入子 市「何でも智恵のある奴「春風に寄る蜂

他の乱も知らぬ人でト悔しさうに言て涙をまぎらかしたる姿娟娟

ある風のあはれしく何にうさゝえん招きまし 市は郎へ見ぬ振をして

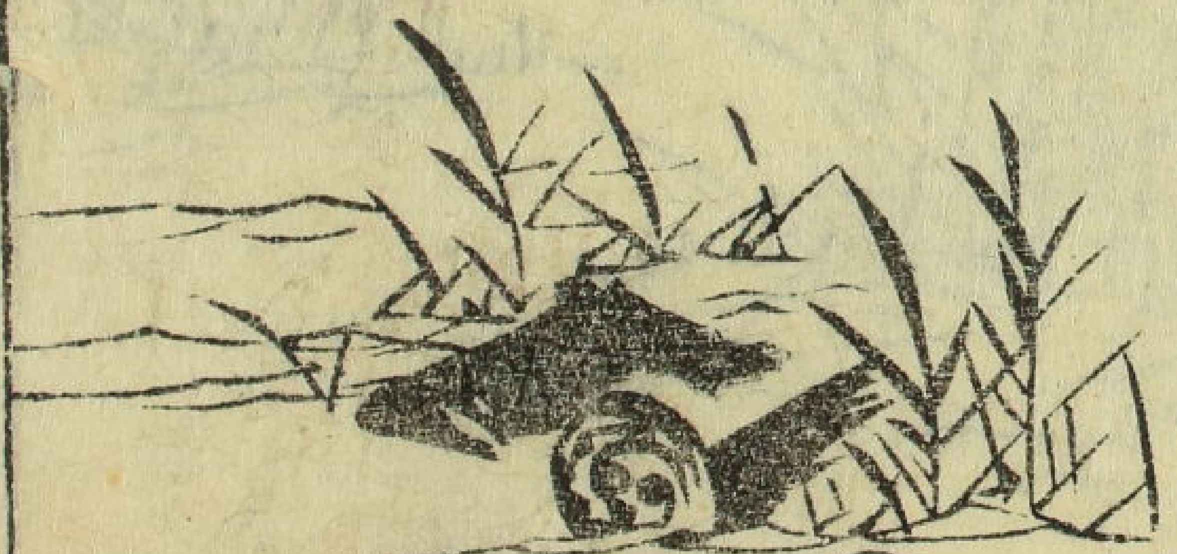
横目に見て居たりしが脊中におもひのあまり

市「ア、津の八まゝねへ トいふ時

風屋ゐて亀の絃をしらめる音ピシヤリ

四方に懐てる船中も夢のやうに消ぬ

舟を動かすまへうちへ寄りしろばや



水邊乃葦荻

見し世江や難波潟ちとせをふるとも

見し人ぞ乃人ねぶるる人まそ

洞房語録以登家奈幾巻之二了